鑑審査

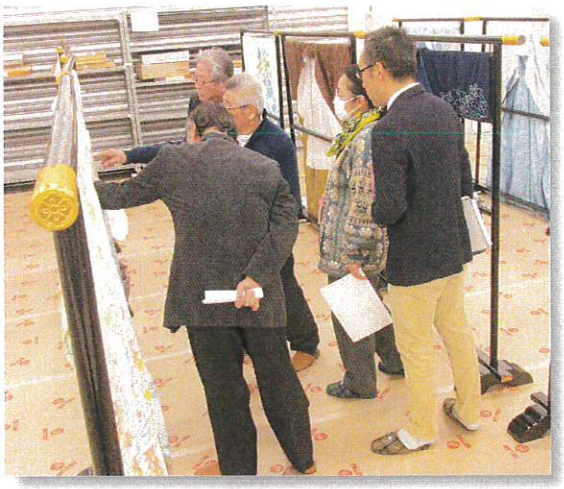
第58回

東日本伝統工芸展 支部展風景

陶芸

鑑審査会議

漆芸



染織

諸工芸

木竹工

金工

人形

審査

第二次鑑査

審査

審査

陳列・列品解説

陳　列

陳　列

陳　列

陳　列

作品解説

作品解説

懇親会

第五十八回 東日本伝統工芸展 授賞式

第五十八回東日本伝統工芸展授賞式が平成三十年四月二十五日（水）日本橋三越本店不二の間にて行われました。

最初に、主催する当東日本支部長に代わり幹事長髙槝寛のあいさつ、共催者東京都教育庁地域教育支援部長のあいさつ、続いて鑑審査委員長から鑑審査経過報告の後、各賞の授与が行われました。

授賞者十六名へ各賞の関係各位の代表の方より賞状、副賞が授与されたのち、文化庁長官の祝辞（代読）をいただきました。

最後に受賞者代表のあいさつがあり、式典も滞りなく終了いたしました。

あいさつ

公益社団法人
日本工芸会東日本支部支部長代
幹事長　**髙槝　寛**

本日のこの挨拶は本来なら根津公一支部長が行うところ、怪我をされたとのことで急遽、私、髙槝寛がご挨拶をさせていただくこととなりました。

第五十八回東日本伝統工芸展において受賞された皆様、誠におめでとうございます。また、ここにお集まりの関係者の皆様、本展覧会にご協力を賜り、誠にありがとうございます。謹んで御礼申し上げます。

私は染織作家でございまして、今回鑑審査委員もさせていただきました。例年のように出品者は横ばいから減少傾向にあるということですが、会員の出品が少ないように思います。その分、若い人の出品が多少増えているのではないかというように感じております。出品数が減ったことと作品の質は関係がなく、むしろ厳選されているのではないかと思っております。二年後の二〇二〇年は東京オリンピックの年に、この展覧会も六十回の記念展を迎えることになります。それに向かって、より多くの皆様に観ていただいて東日本伝統工芸展を盛り上げていきたいと思っております。皆様のご協力をお願いしてご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

東京都教育委員会地域教育支援部長
太田誠一　氏

ただいま、御紹介をいただきました東京都教育委員会地域教育支援部長の太田と申します。

第五十八回東日本伝統工芸展にあたりまして、共催者を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。

皆様には、栄えある賞を受けられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

このたびの受賞は、皆様の日頃からのたゆまぬ努力・研鑽の結果が、ここに結実したものであると思います。

誠におめでとうございます。

伝統工芸展は、工芸作家の皆様が

現代の感性に即して、創造性豊かな作品を発表する場であるとともに、多くの方々が、我が国の優れた工芸作品の美しさや、洗練された創作技術の高さに触れ、これに親しみ、鑑賞する貴重な機会ともなっております。

展示会場には、個性豊かな作品が出品されており、誠に印象深く拝見させていただきました。

本日受賞された方々におかれましては、今後とも伝統・文化の継承に努められ、より一層、ご活躍されることを期待しております。

さて、現在東京都では、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控えています。

オリンピック・パラリンピックは海外の方々が日本を訪れるまたとない機会になります。

より多くの方々に日本に訪れていただくためには日本の魅力ある伝統工芸が重要となってまいります。

とりわけ伝統工芸は、日本の歴史や伝統、さらには技能までも含めた、日本文化の凝縮と言っても過言ではありません。

この工芸展が、日本人のみならず世界の方々にも日本文化を再認識する機会となることを期待しております。

結びに、本展覧会開催のためにご尽力を賜りました関係者の皆様をはじめ、ここにご列席の皆様に厚く御礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございました。

鑑審査経過報告

第五十八回東日本伝統工芸展
鑑審査委員長
増村 紀一郎

ご受賞の皆様おめでとうございます。伝統工芸展は六十四年の長い歴史があります。日本の伝統工芸は如何にあるべきかということに対して、今まで確とした論理があった訳ではありません。伝統工芸様式というものが生まれていると思います。

この様式に対して今まで鑑審査委員長をされた東京国立近代美術館工芸課長や様々な美術館学芸員の方々から伝統工芸に対する様々なご指摘、改善すべき点等のお言葉を頂戴しながら今年も鑑審査の会場に久しぶりにいさせていただきました。そしてかつて、東日本支部の幹事長というまとめ役をやらせていただいた時から、あまり多く変わっていないことを感じました。やはり伝統工芸様式というものの中で皆さん出品なさっているではないかなと思います。

自分の殻を破る、自分のスタイルを変えるというのは素材を変えるか、技術を変えるかをしないとなかなか難しいのですが、その中で、今回、東日本支部として、今までの伝統工芸様式の殻を破るような作品がいくつか見られるようになりました。

何点応募して何点入選して何点受賞したかについては、皆さんお手元にあります図録巻末のほうをご覧になってください。詳しい数字が出ておりますので、お目通しいただければと思います。

若くして賞をもらいますと、作家殺すに刃物はいらぬ、賞の一つもくれりゃいいと、賞をもらったことで天狗になり、伸び悩んでいる多くの若者を見てきました。今回はだいぶベテランも揃っておりますので、お褒めをいただいたということで大いに自信をもってこれからの仕事を励んでください。

おめでとうございました。

祝　辞

文化庁文化財部長
山﨑　秀保　氏

本日ここに、第五十八回東日本伝統工芸展の授賞式が行われるにあたり、一言お祝いを申し上げます。

受賞された皆様、おめでとうございます。このたびの受賞は、皆様のたゆまぬ研鑽のたまものであり、心からお祝い申し上げます。

我が国には、古来、陶芸、染織、

漆芸、金工など様々な分野の工芸の技が伝えられてきており、いずれも素材の特性を生かしながら、長い時間をかけて発達してきた独自の歴史を有しております。このような伝統的技術によって制作された工芸作品は、技術はもちろんのこと、芸術的にも極めて水準の高いものとして、広く国内外より高い評価を得ております。

東日本伝統工芸展は、日本の優れた伝統工芸の保存と発展を期し、現代の感性に即する創造性豊かな作品を発表・展覧することを目的として回を重ねてきました。本年も、このように優秀な作品が数多く出品され盛大に開催されますことを、誠に慶ばしく思います。

受賞者をはじめ、本展覧会に出品された皆様には、今後とも、伝統的な工芸技術と現代的な感覚をともに生かし、優れた作品を制作されることを期待いたします。

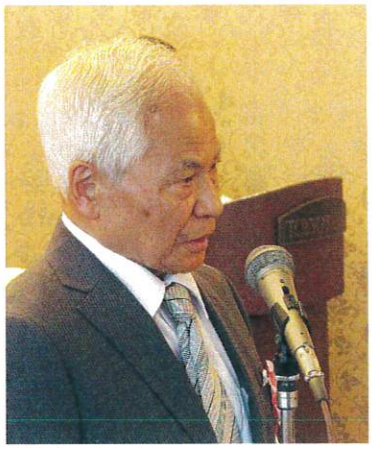
最後になりましたが、主催者の皆様方をはじめ、関係各位の熱意と尽力に対し、深く敬意を表しますとともに、本展覧会のますますの御発展を祈念して、祝辞といたします。

平成三十年四月二十五日

文化庁長官　宮田 亮平

授賞者代表挨拶

本間 昇 氏

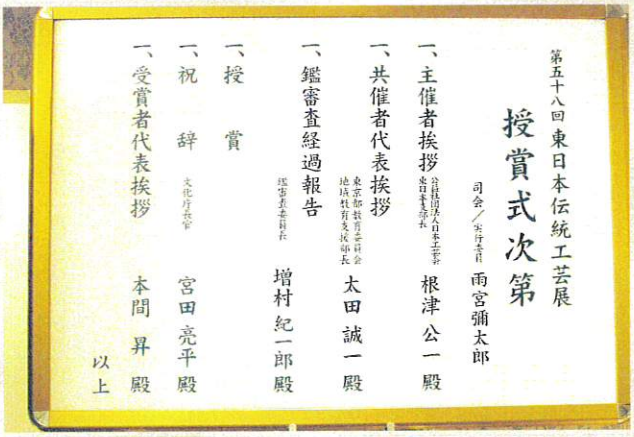


本間昇と申します。私は神奈川県箱根町で七十年を超え寄木造りをしている者でございます。以後、お見知りおきをしていただきたいと思います。

改めて受賞者を代表いたしまして、お礼の言葉を申し述べさせていただきます。

この度、第五十八回東日本伝統工芸展におきまして、私達、過分なる賞を拝受いたしました。この上もない喜びでございます。このことは日頃より諸先生方のご指導をいただいた賜物でございます。ここに厚く御礼を申し上げ、受賞の御礼の言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。



第五十八回東日本伝統工芸展

授賞式次第

司会／実行委員　雨宮彌太郎

一、主催者挨拶　公社団法人日本工芸会　理事長　根津 公一 殿

一、共催者代表挨拶　東京都教育委員会　地域性育成課部長　太田 誠一 殿

一、鑑審査経過報告　運営委員長　増村 紀一郎 殿

一、授　賞

一、祝　辞　文化庁長官　宮田 亮平 殿

一、受賞者代表挨拶　本間 昇 殿

以上

第五十八回 東日本伝統工芸展

鑑査・審査講評

増村紀一郎

今年の一月、東日本伝統工芸展鑑審査委員会の席上で鑑審査委員長に選出された。初めてのことで、就任の弁を一言、ということで委員会に同席の鑑審査委員の皆さんにお願いをしました。

日本伝統工芸展が誕生して64年が経ちました、日本伝統工芸展とはいかにあるべきか?この問いに対して明確な理論を見いだせないまま、六十四年の歴史から日本工芸会の伝統工芸様式が生み出された気がします。例を挙げますと工芸美の中から技術美と素材美を感じる作品は多数みられます。しかしながら造形美のある作品は少数です、ここで言う造形美とは平面作品なら二色できるものです、あるいは「いいね!」ができる模様などです、決して奇抜な形を指して言うものではありません、今までの伝統様式を見直す意欲ある作品を選考する話です。

二月二十八日鑑審査の日になりました。会場には陶芸から諸工芸まで七部門の応募作品四百六十一点で昨年より十六点増となりました。

一次鑑査が始まりました。毎度のことながらどの領域にも応募する前に日本伝統工芸展に足を運んで作品をじっくりと見て、理解してないと思われる出品作品があります、それらに鑑査委員の賛同を得られない作品が加わり、選外となりました。

一次鑑査選考作品に鑑審査委員、特待者の作品を加えた二次鑑査が行われました、部門ごとに作品の投票は鑑審査委員全員で行い、過半数以上の賛成を得た作品が入選となりました。

審査は優秀賞決定の場に各部門から二作品十四点が提出されて、二十一名の審査員の投票で優秀賞九作品が選出されました。奨励賞は、投票の結果七作品が選出されました。

受賞作品のなかで川徳賞の築地久弥作「乾漆弁柄蒔二段重」は漆芸の作品です、漆の色、肌、艶から解放された、漆芸の常識を見直した挑戦する気概を感じます、支部展が所有する可能性のひとつと思います。

陶芸部門

森　孝一

今年の陶芸部門の総応募点数は百九十二点で、昨年に比べて三点減でした。入選作品を約半数に絞り込むという作業は、他の部門ではあり得ないことです。それだけに陶芸部門は狭き門と言えます。今回の審査員は、寺本守、望月集、井口雅代、福野道隆の四名と、森孝一が務めました。審査に当っては、正会員、準会員、研究会員、一般を区別することなく、技術や造形表現の優れているものを残し、作品に魅力を感じないものは落しました。この作業を一巡りした後で机上に残った作品を見渡すと、かなりすっきりした印象を受けました。しかし、入選枠が九十数点と決まっている以上、さらに絞り込まなければなりません。二巡り目は、日本伝統工芸展の作品としてふさわしいかどうか、作品がマンネリ化していないか、加飾と造形とのバランスはどうかなど、入念にチェックして回りました。さらに、落した作品も見直すべきものはないか、再度チェックしました。その結果、正会員から五十四名、準会員から十一名、一般から三十四名が入選しました。

全体を見渡した中で、椎名勇氏の「白金彩線刻文鉢」は、久しぶりにやきものらしい造形の作品が登場したという印象でした。この作品は造形と加飾がうまく融合し、力強い存在感を醸し出しています。現代陶芸は「造形」という言葉に惑わされてはいないか。それはどういうことかというと、造形のための造形では意

味がないということです。どんなに外形が美しくとも、存在感を感じさせない造形は魅力がありません。造形は本質を表現するためにあるのです。日本の工芸の本質は、その素材にあります。やきものならば、素材である土の個性を最大限に引き出しながら、作家の感性とどう融合させ、現代を表現するかです。本質を表現する造形は、作品から醸し出される空気感が違います。目に見えるものだけでなく、感じるものも是非大切にして下さい。本質は目に見えないところにあります。

染織部門

髙橋　寛

今年の染織部門の総応募点数は六十四点（無鑑査含む）であり、人数では二点出品が一名いたので六十三名、他に遺作も二点ある。応募点数は昨年と同じである。内訳は正会員十八名、準会員十二名、研究会員十一名、一般十七名、無鑑査五名であった。

今回の鑑審査委員は、シルク博物館学芸専門員、大野美也子先生を迎え、山岸幸一氏、生駒暉夫氏、松原伸生氏、高橋の五人。審査には大野先生、山岸氏、高橋の三人があたった。

染織部門の展示は、衣桁、撞木、台、と3種の展示方法があるが、特に衣桁の場合は会場の壁面に限界があり、絵羽物の場合は掛けられる数が決まっており、その分絵羽物は他と比べて厳選せざるを得ない。それらのことを事前に話し合い、鑑査をした。

鑑査委員全員で一点、一点話し合い、疑問のあるものを選び出し、さらに検討を加えて一次鑑査の入選作品を決定した。その後、受賞候補の選定は鑑査委員により投票を繰り返し、優秀賞候補二点、奨励賞候補一点を選定し、二次鑑査を経て決定した。

続いて行われた審査会において、岩手県知事賞に菅原高幸さんの友禅訪問着「そよ風」、根津美術館館長賞に鈴木典子さんの紬織着物「瀬音」、奨励賞に小林浩代さんの刺繍帯「月虹」が選出された。

出品作品は総じて質が高く、一次鑑査では大変苦労した、前述したように会場の衣桁の数は限られているので、残念であるが厳選せざるを得ない、また、織りや型染めなどで、絵羽にしなくても、着尺で出品した方が良かったと思われる物もあった。出品の仕方なども考慮して出品すべきではないかと思う。

今回、染織の出品数は昨年と同じ程度であったが、減少傾向はあまり変わっていない様に思う、その中で今回一般の方の出品が十七名であったことが注目される、若い人の出品も増えているように思う、新しい人の応募を歓迎するとともに、会員の応募が少なく、次回に向けて会員の方の応募を強く希望したい。

漆芸部門

鳥毛　清

今回の鑑審査は例年通りの作家四名と学識者一名の五人で行ないました。

まず最初にそれぞれ出品作品を見渡しながら五人が集合したうえで一点一点に意見を交わして入落を決めていきました。

特に落選した作品に五人とも異論もなく、時間もかかりませんでした。それはここ数年の間に落選する作品が減ったことです。出品者の努力でしょう。しかし、落選作が減ったと言え、受賞候補に推薦する作品も悩ましいほど少ないのも現実です。それは二次鑑査にも指摘されました。器物の表面に施されている装飾の技術や表現は良いのですが、蓋のある物だから当然蓋を開けようとすると、開かない物や、開いたところで外の装飾に反して内側の造りの悪さに失望させられる作品もありました。展覧会場では内部や裏側を見る

ことがないからか。自分は装飾専門で塗りや榛地には他人任せの部分だからとか、時間がなかったからと理由もあるのだろうが、そのような言い訳が見えてくるのが作品である。それが表面化したものが作品である。しかしそれらの作品に希望がない訳ではない。

作者にその作品が手元に戻ってよく考えて手直ししてほしいものです。

金工部門

北村 眞一

今年の東日本伝統工芸展における金工部門の出品数は、前年より若干増えて四十三点でした。鋳金・彫金・鍛金それぞれの作品も力作が多く、受賞候補作品を選定するのに、多くの時間を費やしました。

昨年は残念ながら受賞作品が金工部門から出ませんでしたが、今年は期待出来る作品が多く、楽しみに選定致しました。優秀賞候補には林美光さんの木目金箱・鈴木成郎さんの丸釜を推薦致しました。結果は優秀賞に広沢隆則さんと市川正美さん、奨励賞には林さんが入賞し、鈴木さんは入りませんでした。誠に残念でした。

今年の金工は全体的にレベルが高く、前記の四点の他に、浅井征盛さん・萩野紀子さん・押山元子さん・大沼千尋さん・千貝弘さん・進藤春雄さん・松本育祥さん・江田蕙さんなどベテランを中心に優品が多くそろいました。今後は若い人にもっと期待したいと思います。

木竹工部門

藤沼 昇

今年の鑑審査委員にはMOAの内田篤呉先生をお迎えし、作家では新人の桑山弥宏氏、ベテランの木工芸の島田敏宏氏、竹工芸の田中旭祥氏と藤沼昇の計五名による鑑審査委員で鑑査を行いました。今回の出品点数は三十四点で昨年より七点の増でした。鑑査は五人の鑑審査委員全員で、一点一点、丁寧に意見交換をしながら進行しました。

結果、木工六点、竹工二点の計八点が選外作品となりました。それにもかかわらず、優秀賞一点、奨励賞一点の計二点が受賞できました。ただ、今回も鑑審査委員として参加しましたが、昨年と同様な感じが致しました。それは出品点数があまりにも少ないという事です。

鑑審査に当たった他の鑑審査委員も同様な意見かもしれませんが、鑑審査委員を代表して言わせて戴きますと、昨年も今年も、東日本支部展で受賞した作家の方々の不出品におどろいています。二年連続の受賞はないかも知れませんが、前年に受賞した方々は是非出品してほしいと思います。

この会は、会員全体で運営している会なので、受賞する事だけが目標ではなく、この会に所属し、日本の工芸文化構築している仲間です。日本工芸会の会員として、立派に日本の伝統文化を遂行している仲間であり、人格者です。今後の人生活動でも自信を持って、工芸作家でいてほしいと思います。それには先ず、自分の人生に悔いの無い様に、次回の東日本伝統工芸展に出品する事を希望します。

人形部門

外舘 和子

今年は応募総数三十三点のうち四点が選外となり、入選した二十九点に無鑑査の四点と遺作の2点を加えた計三十五点が会場に並ぶこととなった。選考の経緯としては、まず、五人の審査員が個々に○×をつけ、×の多かったものから順次議論し、入選・落選の候補を判断していった。手や顔の作りの不出来、人体としてのバランスの崩れ、衣装が汚れてみえるものなどは、減点の対象となる。議論の末、最終的に入選とした作品の中にも、そのいずれかの点で危ういものが幾つかあったことを指摘しておく。

人形部門としては、優秀賞候補に

青木時子《木芯桐塑木目込「君の力」》と小島尚子《木芯桐塑木目込「蒼穹」》、奨励賞候補に鈴木しおり《木芯桐塑木目込「路」》と福井道子《木芯桐塑木目込「冬青空」》を挙げていたが、最終的に青木時子《木芯桐塑木目込「君の力」》が奨励賞最多得票の二十一票を得て同賞の受賞となった。

柔道を題材にした《木芯桐塑木目込「君の力」》は、フォルム全体が、造形としての確かな動勢を示している。顔の表情も程よく省略が利き、素朴でどこかユーモアさえ感じさせる。柔道着の白を基調に、色彩的な要素を抑えたことも形のもつ力に集中させる効果となった。三百六十度どこからみても楽しめる秀作であるといえよう。単なる外形模写ではなく、二人の人物の組み合わせ全体を一つのフォルムとして捉える姿勢が高評価のポイントである。

同様に、小島尚子《木芯桐塑木目込「蒼穹」》も、上を向いて垂直に立つポーズ、一本に編んだ髪がボディと平行に垂れる姿が、フォルム全体として美しさを示している。衣装も美しい。

人形はただ単に人物や状況を〝説明〟するものではない。ポーズ、ボリューム、顔の表情、衣装、アウトラインなどの総体として、一個の造形としての力強さや迫力、存在感が必要である。そこに、その作り手ならではの個性が表出する時、人形は芸術の域に入る。趣味やお稽古事の範疇ではない、人形作家の表現としての制作を期待したいところである。

諸工芸部門

氣賀澤 雅人

諸工芸の鑑査は、作家雨宮彌太郎・勝文彦・氣賀澤雅人・高橋道子そして学識者竹内順一先生（東京藝術大学名誉教授）の五名にて行いました。出点数は昨年より五点増の四十九点でした。一次鑑査は、例年通り○×式で行い一般四十三点中三十四点を陳列候補として選出しました。また中から優秀と思われる作品三点を受賞候補作品としました。二次鑑査では、特に厳しい指摘はなく、無鑑査六点を含む四十九点の陳列が決まりました。そして、授賞審査は、氣賀澤・高橋・竹内が出席し、由水直樹さんの《硝子飾箱「水面に藤紫」》が朝日新聞社賞に谷脇信子さんの《有線七宝香炉「雅稜」》が奨励賞に選ばれました。由水さんの作品は矩形で下に絞られたフォルムと淡い色合いそしてサイズ感のバランスも良く、いい評価を得られました。また谷脇さんの作品は、水の流れを表現したと言う銀線によるうねりのある曲線、そして形状と色彩のインパクトが審査員の心をとらえ授賞に繋がったと思います。今回一般の入選率は、約七十九％でした。内訳は硝子十三点中九点・七宝二十九点中二十四点・硯一点中一点で砡については、応募○でした。　硯と砡の出展が少なくなっているのは、残念です。作品全体のレベルは安定しており評価できると思います。しかしそんな中から賞候補を絞り込むところは苦労しました。硝子については、若手の応募者が少しずつですが増えつつあります。今回の優秀賞の授賞といい今後に期待が持てそうです。

第58回東日本伝統工芸展　出品者数内訳表

平成30年２月28日実施

部　　門	正会員	準会員	研究会員	一　般	遺　作	計
陶　　芸	68	19	3	92	1	183
染　　織	23	12	11	17	2	65
漆　　芸	29	6	0	12		47
金　　工	30	3	2	7		42
木　竹　工	21	4	1	8		34
人　　形	8	8	13	4	2	35
諸　工　芸	20	12	5	12		49
計　（名）	199	64	35	152	5	455
前57回展計（名）	197	69	33	135	2	436

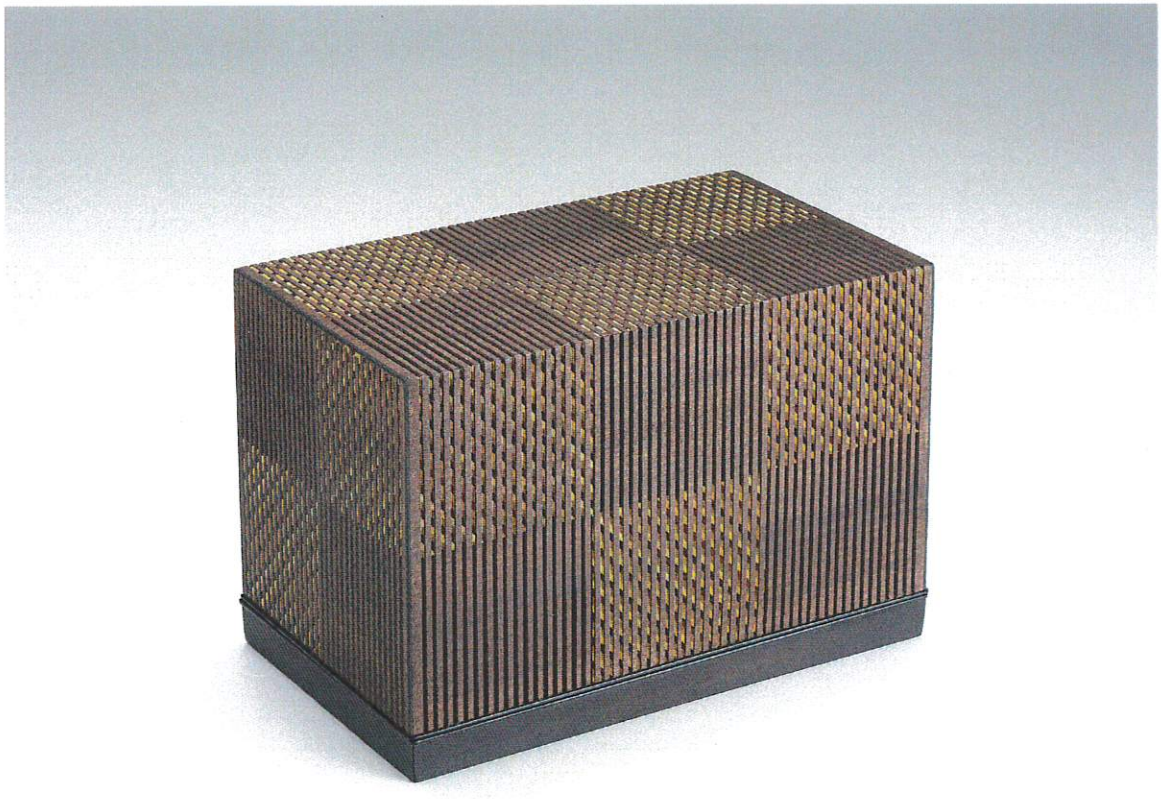
第58回東日本伝統工芸展　鑑審査結果表

平成30年２月28日実施

部　　門	正会員		準会員		研究会員		会員小計		一般		合計		遺作	出品総数
	入選	落選	入選	落選	入選	落選	入選	落選	入選	落選	入選	落選		
陶　　芸	54	15	11	8	0	4	65	27	34	65	99	92	1	192
染　　織	22	1	11	1	11	1	44	3	7	10	51	13	2	66
漆　　芸	29	0	5	1	0	0	34	1	10	2	44	3		47
金　　工	29	2	3	0	2	0	34	2	7	0	41	2		43
木竹工	20	1	3	1	0	1	23	3	3	5	26	8		34
人　　形	7	1	8	0	11	2	26	3	3	1	29	4	2	35
諸工芸	18	2	10	2	4	1	32	5	8	4	40	9		49
計（点）	179	22	51	13	28	9	258	44	72	87	330	131	5	466
前57回展計（点）	185	15	54	16	24	11	263	42	53	85	316	127	2	445

東京都知事賞

神代桂彩色一松糸目筋箱



木竹工

本間　昇

このたびは、思いもよらぬ東京都知事賞をいただき、このうえもない喜びでございます。

長年寄木に携わってきた私は常に寄木の進化を考えて作品を作ってまいりました。今回の作品の制作には昨年の二月より入り、試行錯誤のうえ市松をアレンジした作品に仕上げることができました。

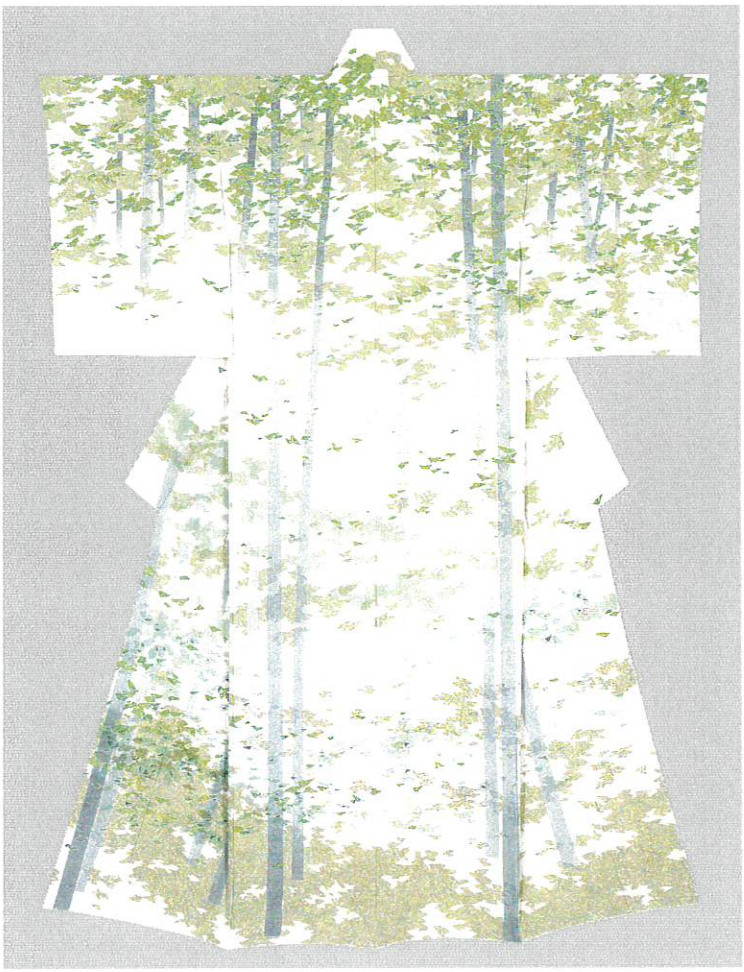
市松模様の材料には、黄色はウルシ、緑はホウ、そして本来ならばアカグスを使うところ不本意ながら赤色の外材を用い、その三色を寄せて挽き割って使いました。糸目筋から覗く寄木のストライプが編み込んだようにも見え、角度によって違う表情を見せてくれます。素朴な有色材でも、木は使い方によって活き、面白さを表現することができると再確認した次第です。通産で半年はかかった作品ですが栄誉ある賞を頂き努力した甲斐がありました。これからも新しい作品に挑戦し、技術の研鑽に努めてまいりますのでご指導の程お願い申し上げます。有難うございました。

■座右の銘
老いて学べば死して朽ちず

■好物
赤ワイン

岩手県知事賞

友禅訪問着「そよ風」



染織

菅原高幸

この度は思いもかけずこのようなすばらしい賞を頂きまして誠に有難うございます。まさか賞を頂けるとは夢にも思っておらず、ただただ恭悦しております。

これもひとえにご指導、ご鞭撻を賜りました諸先生方のおかげと心より感謝申し上げます。

木々の木漏れ日の間をふわりと吹き抜ける風を描いてみたく、またそれを着物として身に纏う形にしたく制作しました。

私は昨年始めて入選させて頂いた折、自分の技術的な未熟さを痛感しました。

今回の作品についてもまだまだ解決すべき課題が山積しており、道程の遠さに眩暈を覚えます。

この度の受賞は今後制作していく上で大きな励みになりました。精一杯精進したいと存じます。

■座右の銘
強く優しくかっこ良く

■好物
みょうが

朝日新聞社賞

硝子飾箱「水面に藤紫」

陶芸

由水直樹

この度は身に余る賞を戴きまして大変嬉しく、光栄に思っております。

これまでご指導戴きました師をはじめとしまして諸先生、先輩方に改めて深く御礼申し上げます。

今回の作品は、水面に映り込む満開の藤棚をイメージして制作いたしました。

薫風の中で水面に揺らぐ藤を、どの様に表現しようか迷いに迷いましたが、飾箱の形態を採る事で、まとまらなかったデザインをコンパクトにまとめる事が出来ました。箱の形状は身の下部が小さく蓋側の上面が大きい、アンダーカットの形状にしました。この形状にした事で、鋳造石膏型が吊り中子型という非常に難しい型にならざるを得ず、大変苦労致しました。色に関しては、自然光下と蛍光灯等の室内光下で発色が変わるガラスを少量使用しています。室内光の下では水色ですが、自然光下では藤色に変化します。

この作品を見て頂いた皆様が私のイメージを感じて下されば いいな、と思っております。

この賞を励みにこれからも自らに問い、考え、より一層精進して参ります。

日本工芸会賞

白金彩線刻鉢

陶芸

椎名　勇

この度は日本工芸会賞を戴き誠にありがとうございました。これまでご指導を頂きました先生方や作陶を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。

この作品は陶土をロクロで円筒形に挽き口と底を楕円に変形して整形しました。そこに線刻と泥彩と白金彩で光の帯をイメージした文様を施しました。見る角度によって器の形と文様との関係が変化するよう試行錯誤しました。

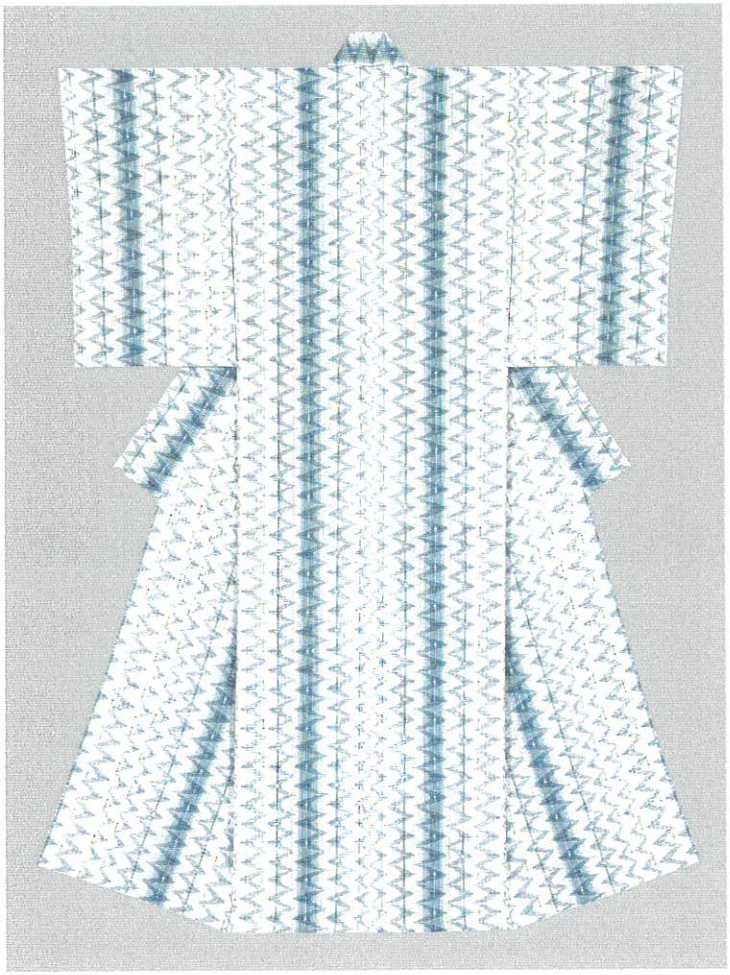
私自身が今年50才という節目の年でもあり今まで続けてきた表現や技術を再確認しながらの制作でした。そんな折に賞を戴くことができ今後の制作にむけ背中を押して頂いた気持ちです。有難うございました。

■趣味
スポーツ観戦

■最近ハマっていること
大谷翔平鑑賞

根津美術館館長賞

紬織着物「瀬音」



染織
鈴木典子

この度は、根津美術館館長賞をいただきまして、ありがとうございました。

思いがけないことに、驚きと共に大変嬉しく思っております。

これもひとえにご指導くださいました先生と支えて下さった方々のおかげと心より感謝しております。

この作品は、信州の小さな川のとぎれることのない心地良い水音と、その清々しい流れを表現したく、縦絣と絵絣を用い制作いたしました。

自分の感じたものを絣で表わすには、まだまだ課題も多く、日々真摯に仕事に向きあっていかなければと思っております。

そして、今回の受賞を励みに益々精進して参ります。

今後ともご指導下さいますよう、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

MOA美術館賞

蠟銀花器「花風」

金工

広沢隆則

この度はMOA美術館美術館賞を頂き、誠にありがとうございました。

伝統技法である真土型鋳造法で制作しています。技法は大まかに、粘土による塑造、石膏原型、鋳物土による鋳型制作、鋳型焼成と鋳造、仕上げ、表面処理、研磨、着色で、細分すると200を超える工程があります。扱う素材は次々に変化し、鋳造してやっと金属になります。そこまでで仕事としてはちょうど半分です。造形技法である鋳金は、器形と地金の2つの要素で表現します。出来るだけそぎ落とした簡素な器形と、印象的な口作りを心がけています。地金は合金の割合と熱処理を工夫し、ねらいとする色調に近づけます。

この作品は春の心象風景です。「花風」とは、桜の花の盛りに吹く風を意味します。朧銀の柔らかな色調で春の穏やかな陽光を、雲形に切られた口で吹き渡る風と花びらを表現してみました。軽やかな印象を出すために、作品下部は僅かに弧を描くように造形しました。

評価していただけたことは大変うれしく、励みになります。今後も真摯に制作に向き合って行きたいと思います。ありがとうございました。

■座右の銘
雲外蒼天

■好きな芸能人・スポーツ選手
新垣結衣

三越伊勢丹賞

釉刻色絵金銀彩大皿

陶芸

伊藤北斗

この度は三越伊勢丹賞を頂き、誠にありがとうございます。

陶芸を始めて30年以上になりましたが磁器の色絵付にこだわって試行錯誤の繰り返しでやってまいりました。

今回の作品は、近年取り組んでいる、色釉を、点描で描いて本焼し、その後上絵付で焼き重ねていくという技法で、魚の群れを表現してみました。今回の受賞を励みに、形と絵付文様の完成度を、さらに深めて、多くの人に少しでも美しいと思われる作品を、作ってゆきたいと思います。

今後とも、よろしくお願い申し上げます。

ありがとうございました。

■最近ハマっていること

シチュー作り

■好きな芸能人・スポーツ選手

桑田佳祐、イチロー

川徳賞

乾漆弁柄蒔二段重

漆芸

築地久弥

この度は川徳賞を頂き誠に有難うございます。自分にとって新しい表現にチャレンジした作品でしたので、このような評価を頂けたことも嬉しく思います。

日頃、自分にしか表せないものは何か、自問自答し創作は始まるのですが、それはとても苦しい時間となり過ぎていきます。その過程で生まれた作品は納得するものではないにせよ、次へのステップとなります。新しいことへの挑戦は思わぬ評価も受けますが、既存の焼き直しではなく、前向きの制作姿勢が私の信条とこれからも続けることでしょう。

モチーフは植物の実のイメージを形態に表し、石膏型に自作の刃物で線上の彫りを入れて表現しました。仕上げは変り塗の中の鉄錆塗りを参考に私なりに表現しました。

これからも自分の可能性を信じ創作に励みたいと思います。

■趣味
キノコ狩り

■最近ハマっていること
珍しい植物を育てる事

布目象嵌鉄箱「椿」

日本工芸会東日本支部長賞

金工

市川正美

この度は、思いがけなく東日本支部長賞を頂きありがとうございます。

今までの作品と変わりませんが、好きな花の一つである椿を模様化し、花芯の所を少し彫り下げて、立体的に見えるように布目象嵌で仕上げました。

ともすると眠りそうな自分に活を入れ、新たな気持ちで一歩ずつ頑張ってゆきます。

これからも日々精進を重ねていきたいと思います。

■師匠・研修先
鹿島一谷

■趣味
水石、盆栽

奨励賞

線文花器

陶芸

朝倉 由紀子

この度は、第五十八回東日本伝統工芸展の奨励賞をいただく事が出来、大変感激致しております。ありがとうございます。

黒い土をロクロ成形し、高台は四角にそして上に伸びるにつれ、円へと変わって行くというフォルム。生地を磨き還元焼成。パラジュウムによる上絵付を行う。

この仕事をここ数年好んで行っております。

光線の具合で銀彩が明るく光って見えたり、又影の部分では、黒陶の中に埋没しそうな部分も有り、その光と影をこれからも追求して参りたいと思っております。

これからもいただいた賞を励みに、自己をみつめながら、創作に励んで参りたいと思います。

今後とも先生方のご指導を宜敷くお願い申し上げます。

■座右の銘

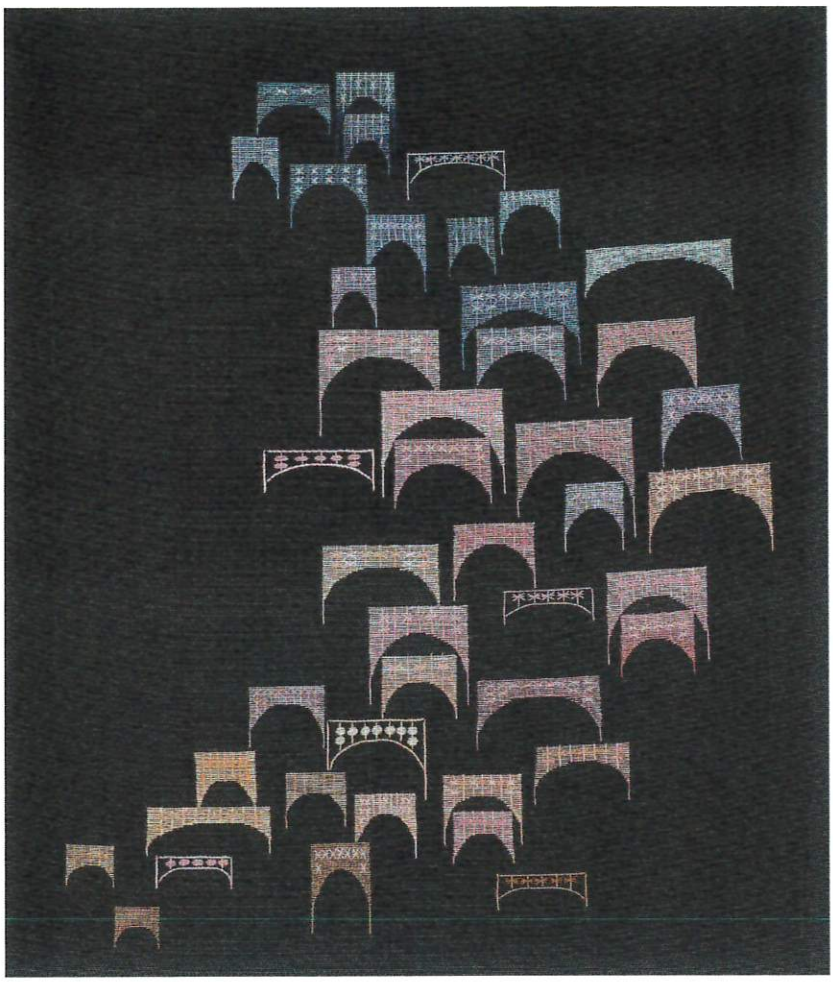
驚きは、知ることの始まりである

■好きな芸能人・スポーツ選手

小平奈緒

奨励賞

刺繍帯「月虹」



染織

小林浩代

この度は奨励賞を頂きまして誠にありがとうございました。思いも寄らない受賞に大きな驚きと共に喜びでいっぱいです。

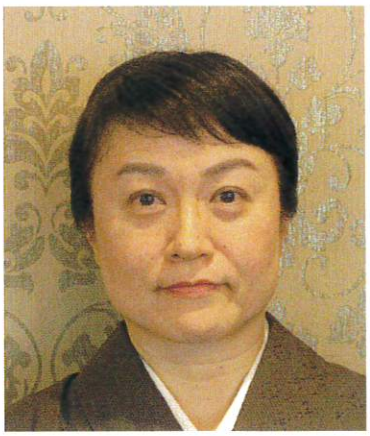
今回の作品は以前から心惹かれていた、なかなか見ることができない「夜にかかる虹」というどこか神秘的な現象を、自分なりに表現したいと思い、これまでと違った図案の構成を考えました。

紬の濃い地色に、色や太さを考えながら撚り合わせた糸を織り繍いの刺し方で乗せていくそのボリュームやバランスに苦労しました。

図案の構成も技術もまだまだ未熟で反省ばかりの作品づくりですが、刺繍の美しさを作品の中で魅力的に表現できるよう、一層精進してまいりたいと思います。

これまでご指導下さった諸先生方そして励まし支えて下さった多くの方々に心より感謝申しあげます。

また今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



■座右の銘

他の人と自分を比べる事をやめた時に幸せは訪れる

■最近ハマっていること

六、七年前から東京マラソンの沿道でランナーに声援を送ること

奨励賞

曲輪造盛器

漆芸

髙橋玲子

この度は奨励賞を頂戴致しまして、誠にありがとうございました。

ここまで長い間続けて来られましたのもすばらしい先生方との出会い、そしてご指導のお陰だと心から感謝申し上げます。

今回の作品の曲輪造は、厚さ二ミリの檜の柾目板を六十枚曲げ、重ね、組み本体を造りました。

暗闇から昇る太陽を赤い一本の線とし、闇との境をぼかし、太陽から射す光を細い金の線で表現しました。

これからも、なお一層精進して参りたいと思います。

ありがとうございました。

■趣味
鎌倉彫

■受賞して一言
ありがとうございました。
今後共、精進して参ります。

奨励賞

金銀銅杢目金板目段飾箱「包む」

金工

林　美光

金銀銅杢目金板目鍛飾箱は、天然秋田杉の板目紋様を杢目金の技法で表現したものです。

秋田県は昔から金、銀、銅等、各種鉱山が栄え、金銀細工に於いて幾多の名工、名品を産んで来た歴史があります。中でも江戸時代の名工、正阿弥伝兵衛の名は広く知られ、刀装具などの数々の作品が残されておりますが、取分け稀有で技術的難度が高い金の杢目金の創始者として知られています。

本作品は一度失われたこの技法を永年の研究の末現代に再現したものです。また過去の作品には存在しなかった「板目紋様」を苦難の研究の末に実現、鍛金打ち出しによる高難度の造形と合わせ、伝統技術を高度に昇華させ現代に蘇らせた作品です。

奨励賞

千筋組扁壺花籠「晶晶」

木竹工

江花美咲

この度は思いがけず奨励賞を頂きましてありがとうございました。これまでご指導いただいた先生方、支えてくれた家族のおかげと感謝申し上げます。

今回制作した千筋組扁壺花籠「晶晶」はひごを平行に並べて組み合わせる千筋組と言う技法を使用しています。作品正面の中央部と側面に使用しているひごは、中心部を太くして両端を細くしています。このひごの変化で花籠全体の上下の幅を変えました。籠の上下を曲げて中央にくびれを作る事で全体のバランスをと整えました。

籠の中央部を支える張り胴輪に巻くトウの色に金茶色を使用して全体が黒一色の籠の見ためにポイントを作りました。

今回の作品の見所は、千筋組と曲げによるひごの重なりで生じるモアレと言う模様です。モアレ模様は見る角度によって変化します。この模様の変化が光の瞬きのように感じられたので、作品名をきらきらと輝くさまと言う意味の「晶晶」と名付けました。

この度の受賞を励みにより一層精進して制作に打ち込みたいと思います。

■好物

れんこん

■最近ハマっていること

Web小説

奨励賞

木芯桐塑木目込「君の力」

人形

青木時子

このたびは奨励賞を頂きまして誠にありがとうございました。

私はこれまで女性の和服やドレス姿の人形を制作しておりましたが、数年前より実在の人物をモデルに構想を練り、観察し、制作に取り組んでまいりました。今回の作品は柔道を習っている孫を題材に、試合の熱い瞬間を表現制作しました。造形では顔や手足、全てを力強く表現する事は難しいものでしたが、完成を思い浮かべ木を彫り、道着では二種類の布を貼り重ね、切磋琢磨しながらも楽しく仕上げた一体です。

武道館に何度か見学に行き、学生達の礼儀や精神力を目の当たりにし自分の気持ちが引き締まり、改めて努力と感謝の気持ちと共に、今後は賞を励みに新たな人形制作を心掛けてまいりたいと思っております。

■座右の銘

今がその時！

■趣味

昨夏から毎日続いている二・七kmのウォーキング

奨励賞

有線七宝香炉「雅稜」

諸工芸

谷脇信子

この度は奨励賞をいただきまして、誠にありがとうございます。思いがけない受賞に驚きとともに、大変うれしく思っております。

アクセサリーでもと思って始めた七宝でしたが、素晴らしい先生に出会い、御指導いただくなかで、すっかり魅了されてしまいました。

今回の作品は、旅先で見た山々のなだらかに伸びる稜線や重なり合う稜線の雄大さと美しさに感動し、それをモチーフに制作いたしました。

毎回のことですが、制作にあたっては、形、デザイン、色で悩み、焼成で思いがけないトラブルにあうこともあります。

まだまだ技術的にも未熟で、課題の残る作品が多々あります。

この度の受賞を励みに一層努力してまいりたいと思います。

今後とも御指導下さいますようよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

■趣味
旅行

■好物
野菜、甘いもの